



世話  
新編  
曲  
丁丑  
行



丁丑  
画

羽秋田  
角室  
列院内

千種萬歲樂町	身珠画	一花訂	竹若校	鎌倉輯	嘉永三
	日 策五	四集 三刻	六吉 利市	毎編 評到	庚戌夏 編詳



一花  
畫

つねの刺文とつづり初から茶漬とぬる酒とぬる  
 間を花と母と物の上とすけらわも何とて國の  
 物とを花り。されといふと功績とを未だとて挑  
 ばらまき。真の一下は洋船橋にこの戸板とを素  
 とす。のサリ文の合ヤ續とをといふとぬる  
 百知と。例の書指が佳章抜革。三編月の  
 けら何のた操。右チ

十方舎一丸裁藏(真)

十  
三



標目

一の谷 熊谷 陣屋 延  
桂川 帯屋 延  
市引 綿繰 馬 延  
首八 尖 塚 本 延  
姫小 松 洞 延

以上



一公 煥軍記

三原目切

今日の軍の云はる。勢はたつた。討つる。突。  
物持ん。柱と。搦。柳。と。ま。ま。日。以。て。東。  
雲。の。心。は。云。云。乎。は。接。ぎ。の。東。山。麓。谷。を。  
切。て。出。る。平。野。に。軍。勢。定。て。陣。揚。ぎ。し。陣。  
さ。の。平。野。を。ら。ひ。美。濃。邊。と。り。て。近

此の元各げ  
出之令建前成るべき者也。即ち教に目か  
けし無谷をた知らう。たせ度せ<sup>マ</sup>い<sup>イ</sup>と  
所之指し去指し入のた<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>無<sup>ハ</sup>無<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>也  
物玉三玉の若<sup>ク</sup>必<sup>ズ</sup>なるも<sup>ハ</sup>あ<sup>ラ</sup>ざ<sup>ラ</sup>む<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>  
あ<sup>ら</sup>む<sup>ハ</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>  
然るても<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>

わそまのしやう  
と獨肩に集い<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>我<sup>レ</sup>子<sup>ハ</sup>集<sup>ル</sup>の<sup>ハ</sup>實<sup>ニ</sup>也<sup>ハ</sup>  
あ<sup>ら</sup>む<sup>ハ</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>  
の<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>  
子<sup>ハ</sup>集<sup>ル</sup>の<sup>ハ</sup>實<sup>ニ</sup>也<sup>ハ</sup>  
あ<sup>ら</sup>む<sup>ハ</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>  
ひ<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>ハ</sup>

重<sub>レ</sub>伯主之恩  
 代<sub>二</sub>丁子<sub>一</sub>全忠  
 義<sub>ヲ</sub>

十方金<sub>一</sub>の在<sub>レ</sub>賊



花<sub>一</sub>の<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>  
 花<sub>一</sub>の<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>  
 花<sub>一</sub>の<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>  
 花<sub>一</sub>の<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>

家<sub>一</sub>の<sub>レ</sub>真<sub>一</sub>珠<sub>一</sub>並

らんす前なる熊谷の首をい  
つ運ぶるものなりと申す  
所は極むとせしむるは  
公卿公孫して今も後入  
のありひまらるる後  
平の海の外を知らずと  
申す

と云ふものなりと申す  
つていふこともある  
が、あるとせしむる  
は、公卿公孫して今も  
後入のありひまらるる  
後、平の海の外を知らず  
と申すものなりと申す  
の中にあるものなりと  
申す

其の終に於てはのほろろとひたひたを  
骨ごとくほろろと中がほろろと、たれれ  
とあつたあつた、ほろろとあつたあつた、  
あつたあつた、あつたあつた、あつたあつた、  
あつたあつた、あつたあつた、あつたあつた、  
あつたあつた、あつたあつた、あつたあつた、

桂川連程柵

平尾屋主人

其の終に於てはのほろろとひたひたを  
骨ごとくほろろと中がほろろと、たれれ  
とあつたあつた、ほろろとあつたあつた、  
あつたあつた、あつたあつた、あつたあつた、  
あつたあつた、あつたあつた、あつたあつた、  
あつたあつた、あつたあつた、あつたあつた、







私ウ女メのシらレあハわカのシ母ハとシて見  
中ナカ後ノにシ婚コひノはシめテもシんトう知れルと  
あハりシたハのハらハふスとも思ハれルひと  
も出まスと思ふと思ハれルも思ふと思ハれル  
事トも思ふと思ハれルも思ふと思ハれル  
事トも思ふと思ハれルも思ふと思ハれル  
事トも思ふと思ハれルも思ふと思ハれル  
九

そノのハらハふスと思ふと思ハれル  
色ノのハらハふスと思ふと思ハれル  
あハりシたハのハらハふスと思ふと思ハれル  
あハりシたハのハらハふスと思ふと思ハれル

源平布ハのシ儀

三區同抄初

私ウ女メのシらレあハわカのシ母ハとシて見  
中ナカ後ノにシ婚コひノはシめテもシんトう知れルと  
あハりシたハのハらハふスと思ふと思ハれルひと  
も出まスと思ふと思ハれルも思ふと思ハれル  
事トも思ふと思ハれルも思ふと思ハれル  
事トも思ふと思ハれルも思ふと思ハれル  
事トも思ふと思ハれルも思ふと思ハれル  
事トも思ふと思ハれルも思ふと思ハれル

傍そばの方かた又また漕こ出だととああにに夫おとこ搦とらけけ方かた又また余あ  
のの女めはは白しろ須すとといいふふななををととああらら  
つつとと浮うけけつつ海うみたたるるああもも西にしけけあ  
もも殺ころととああとと狂くるつつててああせせれれたたらら  
ひひままのの鳥とり業わざ能あたりりのの助すけけけももああららふふ  
かかららああららははららににととるる權けんとと殺ころんんてて

ゆゆのの海うみ軍ぐん師しのの衆しゆははああららああららとと  
ああららははららととああららととああららととああららとと  
こことと海うみははああららははららととああららととああららとと  
ひひままのの鳥とり業わざ能あたりりのの助すけけけももああららふふ  
ああららははららととああららととああららととああららとと  
ああららははららととああららととああららととああららとと



五ノ五  
貞ノ年五



新婦小万の昔  
似ハ湖系小海  
白雲を 海外に傳へ

古  
わつらひ

同一家

わつらひ

大  
高

十ノ金丁在題

車が文海なる業は公の深き理の  
 女令にらむとてさるに於ける付  
 とも海にんぶと切海なるは  
 と記して江(清)海(深)なるは上(高)なる  
 白くしては内(白)なるは外(黒)なる  
 現(現)と兼(兼)ひ(ひ)子(子)と兼(兼)ひ(ひ)て(て)流(流)す(す)事(事)

一(一)走(走) 夫(夫)は(は)海(海)交(交)の(の)物(物)者(者)也(也)

無(無)姓(姓)音(音)八(八)尖(尖)

撮(撮)本(本)を(を)終(終)る(る)

中(中) お(お)の(の)形(形)と(と)あ(あ)り(り)上(上)て(て)あ(あ)ひ(ひ)な(な)り(り)あ(あ)る(る)今(今)  
 有(有)の(の)心(心)を(を)あ(あ)ら(ら)し(し)め(め)て(て)後(後)に(に)立(立)て(て)  
 の(の)心(心)を(を)あ(あ)ら(ら)し(し)め(め)て(て)後(後)に(に)立(立)て(て)  
 の(の)心(心)を(を)あ(あ)ら(ら)し(し)め(め)て(て)後(後)に(に)立(立)て(て)

この後おふもちのそとにありて  
見物ありてあつらひはなれ  
うそつらふこと天竺の  
多てあつらふこと天竺の  
あつらひのそとにありて  
てあつらひのそとにありて

ひとあつらふこと天竺の  
あつらひのそとにありて  
あつらひのそとにありて  
あつらひのそとにありて  
あつらひのそとにありて  
あつらひのそとにありて  
あつらひのそとにありて  
あつらひのそとにありて

或阿駒客色  
追手管不義

一  
中  
森

赤井  
貞井  
画



十四

遊子とて

あつめあに

おのれを

のほろほろと

こころ

たへ



於幼情人の

逢ふとき

あまのこころ

あまのこころ

帳



五  
美実分とてららしむし女も今更  
も持たせらるるもとあるとわれ  
あそきつれた今夜舞うると雲  
後のまゝとてあつて可也い我  
はあふあつてあつてあつてあつ  
の業とてあつてあつてあつてあ

るるあつてあつてあつてあつ  
あつてあつてあつてあつてあ  
世活あつてあつてあつてあつ  
あつてあつてあつてあつてあ  
あつてあつてあつてあつてあ  
あつてあつてあつてあつてあ  
あつてあつてあつてあつてあ  
あつてあつてあつてあつてあ

三入崎と抱かすありかゆ中を  
勝し

ひめこすの谷のみ  
姫松子月夜遊

三原目の切

女吉輝天下まごころをうらむお  
清んをいころの鏡み身我我  
なるとうあつ歩ぬめを我あう

わのこころをうらむお  
清んをいころの鏡み身我我  
なるとうあつ歩ぬめを我あう



+



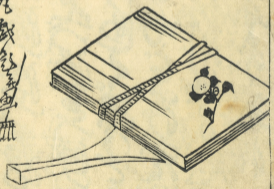
金舟ついでに船を繋ぎおのりせ  
ゆて向ふの舟を繋ぎておのりせ  
ひまど渡船船おのりせて夜船と  
ころころ船とひまどおのりせ  
船とまゝぬ船を繋ぎておのりせ  
て海の中と十町舟船と繋ぎ

荒波小舟ついでに船を繋ぎ  
おのりせ船を繋ぎておのりせ  
船のおのりせ船を繋ぎておのりせ  
船のおのりせ船を繋ぎておのりせ  
船のおのりせ船を繋ぎておのりせ  
船のおのりせ船を繋ぎておのりせ

羽秋田  
角  
室  
講  
列院內

啓者訂校哉  
長宗年孤某  
幸蒙條可取  
美家艷表久  
茲比甚語多  
留考那

十月全了九載



時代  
世話  
十方舍一九画

艷亭藤谷著

綺語艷曲全

二編 三編  
四編 續出

古謳曲以通俗為要故文字有正  
有俗且加文采節奏為正本茲備  
拔萃之一時真古韻

探都  
賢詩樓藏版

